

武内博編著『日本洋学人名事典』

ひと昔も前のことだが、日本医学史人名事典の編纂が企画されたことがある。その準備会に集った研究者の中から、自信をもって分担執筆できる人物は何名位になるかと話題になったことがある。そのときの話では、個人の執筆では、数少い人物しか自信をもって書けないことがわかった。それほど人物伝は、立場や把え方によって異なる視点があって、よほど長年にわたって調査・研究を続けていないと、自信のもてる執筆はむづかしいことがわかる。

それを立場や分野こそ違い、一人で独力で手掛けた人がいる。それが本書の執筆者、武内博氏である。

武内博氏は、永年図書館畑を歩いてこられた方だが、一九八三年に一人で『来日西洋人名事典』を手掛け、本年その増補改訂普及版を刊行、さらに今回は『日本洋学人名事典』を刊行された。

本書は、医学研究者にとつて、漢方関係こそ含まれてはいないが、多くの医学者を収めているので、有用な情報源がさらに一つ加わったことになる。

本書は、三部構成をとり、

I 洋学人名事典

II 全国墓碑所在一覽・主要洋学者墓碑銘全文

III 主要洋学者門人帳

を収め、付録として、

1 洋学関係私塾・藩校等配置図

2 洋学関係資料所蔵機関一覽

3 主要参考文献（昭和初期から最近まで）

4 活動分野別索引

5 出身地別索引（旧国名、県名）

からなり、

著名な人物から未紹介の中央・地方の学者まで、一、一〇〇余名の人物情報を収めている。

もつとも、一個人の手掛けたものであるため、広汎な分野を含む本書のような性格の事典では、限界をもつのもいえないし、他の研究者の業績の援用についても手続の上で問題があつたようだ。これらすべてが編著者の責任とはいえないにしても、図版の選択についても同じようなことがいえる。

巻頭の口絵にハッと驚く図版が誤って掲載されているのも気になる。『平次郎藏図』と記す図版が、医学史研究者にとつては明らかに別のもの（中井履軒『越俎弄筆』）であることは一見して明らかである。

しかし、このような点を考慮に入れても、本書を利用するとなると、便利この上ない編集になっていて、編著者の労を多としたい。

それぞれの立場で気付いた点を編著者に提示することによって、向後の改訂、増補に資し、大方の活用には宜やかっ

てほしいと願うのみ。
(宗田 一)

〔柏書房・東京都文京区本駒込一―一三一―四、電〇三―三九四
七―八二五―、平成六年刊 B 5 判、五八〇ページ、一八、〇〇
〇円〕

石山昱夫訳『メンデ法医学小史（一八一―九）』

石山先生がメンデの法医学史 (Mende, L. J. C.: Ausführliches Handbuch der gerichtlichen Medizin für Gesetzgeber, Rechtsgelehrte, Ärzte und Wundärzte, Tl. I. Kurze Geschichte der gerichtlichen Medizin, 1819) を取上げ、御自身の研究遍歴にからめて情熱をもって語られていた。それを三年程前、本学 K 教授から教えられ、氏の翻訳完成を期待したが、私はやがてすっかり忘れていた。この度初めて本書上梓を知らされ、喜んで「紹介」を引受けた。そして実物に接し、心はずませ一読にかかったものの、私如きが扱えるものではないことに気が愕然とした。しかし一旦お引受けした以上何とかせねばならない。気の重い日が続いた。

三年程前云々というのは、氏が一九九二年一月、日独協会例会で「ドイツにおける法医鑑定成立」と題し講演された「要旨」を指す。それと本書あとがき（解説）を交えて、本書のなりたちを以下に記そう。

氏とメンデ原書の出合は偶然ではあるが必然ともいえる。

氏は、法医学の実務（鑑定）においては、実際に得られる所見（実）と学問理論で導き出せる底流（虚）とが一体となつて始

めて結論が得られるという。即ち「点」でしかない非連続的な所見を理論で結びつけて連続的なものに仕上げる。氏のいう「法医学の虚と実」である。そして虚は Medizinische Wissenschaft であり実 は Medizin である。

以上は氏の現在到達した哲学であるが、それまでには色々試行錯誤があつたろう。法医学の問題について、過去の人類がどういう風に処理をしたか、即ち現在の到達点（最新知識）ばかりではなく多様多面な歴史（過程）を考える（知る）必要がある。しかしこんな悠長なことを調べては学問の競争、出世コースから外れるし、第一そんな暇もない。そんな矛盾を感じていた時「東大紛争」に遭遇する。教室が全部封鎖されて何もすることがない。仕方なくこの機にドイツの古い本でも読んでみようと考え、教室の戸棚を漁っていると奥の方から紙に包んだままの該原書が出てきたのだという。原書を一読し、氏のそれまでの渴が癒されたという運命の書である。メンデ（一七七九―一八三二）はゲッチングン大学出身で、グライフスワルド、ゲッチングン両大学教授（法医学、産科学）を歴任した。本書は浩瀚な法医学全書（全六巻、一八一九―三二二）の第一巻に当る。彼はベルリンやボン大学に招聘された程の（ただし辞退）大家、実力者であつたという。

メンデの歴史観は次のようである。法医学の歴史などというものはたぶん誰にも書けないだろう。まず、当時（各時代）の社会の発展に伴う民族の文化（国家、法体系）、即ち法制史の問題がある。当然歴史（学）そのものも知らねばならぬ。更に